

關清水

といふことはむかし日本武のみこと東夷征罰し給ひし比當國伊吹の山に入給ひしに伊吹大明神大蛇と現じ道の中にわだかまりしを尊とびこへ給ふとて御足すこし大蛇のひれにあたりそれよりいたはり給ひ大ねつきさしけるを道のほとりにありける清水に御足をひたし給へばそのまゝねつきさめけりとなんさてこそ此名はありけるといへり汲て知人しもあらば醒井の清き心をあはれとやみん

書言字考節用集

乾

坤

關

清

水

見

鴨

長

明

集

〔拾遺和歌集〕秋延喜の御時月次の御屏風に、

貫之

あふ坂の關の清水にかげみえていまや引くらむ望月の駒

〔長明無名抄〕ある人のいはく逢坂の關のゑみづといふは走井とおなじ水ぞとなべては人ゑれり、ゑかにはあらず、清水は別所に有、今は水もなければ、そことゑれる人だになし、三井寺に圓寶房の阿闍梨といふ老僧、たゞひとり其所をゑれり、かゝれどさる事やゑりたると尋る人もなし、我ゑ、て後はゑる人もなくてやみぬべきこと、人に逢て語けるよし傳へき、てかのあざりゑれる人の文をとりて、建暦のはじめのとし十月廿日あまりの比、三井寺へ行あざりにたいめんしていひければ、かやうにふるきことをきかまほしくする人もかたく侍めるをめづらしくなんいかでかゑるべつかまつらざらんとて、ともなひてゆく、關寺より西へ二三町ばかり行て、道より北のつらに少したちあがりたる所に、一丈ばかりなる石の塔有、そのたぶの東へ三段ばかりくだりて、くぼなる所はずなはちむかしのせきのゑみづの跡なり、道よりも三段ばかりや入たらん、今は小家のゑりへになりて、當時は水もなくて見どころもなけれど、昔のなごりおもかげにうかびて、いうになんおぼえ侍し、阿闍梨かたりていはく、この清水にむかひて、道より北に、うすひはだふきたる家ちかくまで侍けり、誰人のすみかとはゑらねど、いかにもたゞ人の